中国における老人社会学研究の重要性

袁　　緝　輝（上海大学副教授）
訳および解説・田辺　義明

老人社会学は社会学の重要な下位領域であり，現在それは人々の広汎な関心と注目を集めつつある。中国社会学会は老人問題研究部会を設け，上海にも老人問題研究会が組織されている。国連は1982年7月26日から8月6日までウィーンにおいて「老齢問題世界大会」を開催し，中国政府代表団もこの会議の席に加わった。小論においては老人社会研究に関する一つの見解を述べる事としたい。

突出する老人問題

老人問題研究の展開はきわめて重要である。それは次の事柄に由来しよう。——諸個人は仕事や生活の場において必然的に老人と接しなければならない事。人間は少年から青年・中年を経て老人に到るという自然の摂理に支配されている事。老人が社会生活や家庭生活において依然として重要な役割を果している事。——などである。加えるに昨今の世界にあっては，老齢人口の比率が急速に増大し，それが老人をめぐる諸問題をさらに突出させている。

老人とは何か。世界の通例に従えば一般に満60歳が老人の目安とされている。60歳以上の老人が全国総人口の10%を超えている国家を「高齢化国家」と呼び，この基準によると一部の先進諸国は既に1950年代から高齢化段階に入り始めており，今の趨勢では高齢化社会はさらに増加し続けよう。

今世紀初頭における先進国市民の平均寿命は50歳前後に過ぎず，植民地のそれは20歳にも満たなかった。現在，世界人口の44億の内，60歳以上の老人はその12%を占めている。今後は出生率が低下し，また医学・薬学の絶え間ない進歩も伴い，老人の占める比率はさらに増大を続けよう。今世紀末を予測した場合，世界の60歳以上人口は5億8千万に達するとされている。さらに今の趨勢では，単に老人が増加するばかりではなく，より高齢な老人が日ごとに増している。

わが国にも同様の傾向が認められる。解放以前，わが国における平均寿命は35歳前後であったが，現在のそれは男性66.95歳，女性69.55歳に達し，今や世界の長寿国に肩を並べるまでに到った。1980年の一部地域の調査から推計して，60歳以上の老人は全国総人口の8％を占めており，ここ数年はさらに増加していよう。社会主義の建設が発展を続け，物質的生活水準は日ごとに上昇した。そして社会福祉事業が大規模に実施され，医薬・衛生などの条件も整備された。さらに老人をいたわるという社会主義的新風潮が発揚され，それらによって人々の平均寿命は一層引き延

ばされた。しかも計画生育（家族計画）が推進されて出生率が低下し，それによっても老人の比率はさらに押し上げられていよう。人口学者の予測するところでは，2020年代から30年代には，わが国における老人の比率は20%に達するという。

わが国にあって，かくも老人の比率が急上昇しているのは，人民の物質的生活水準や医薬・衛生の水準が高められた結果であり，これはまた社会主義体制の優越性の現れといえよう。わが国人民の伝統における高尚な敬老の美徳，それに加えて社会主義における同様な伝統的美徳も社会に内包されている。しかし社会全体から見れば，老人の増加は，生産活動から単なる消費活動に移行した人員の増加を意味し，それは家族，社会そして国家に幾多の新しい問題をもたらそう。従って我々はこの種の問題を正確に認識し解決する為に，老人社会学の研究を積極的に展開するのである。

老人に関する問題はきわめて多く，一般的には，それらは自然的な問題と社会的な問題の二方面に分けられる。自然的問題は主として，如何にして健康と長寿を保つかという事であり，これは医学や生物学などの自然科学が研究し，解決すべき問題である。社会的問題は主として，如何にして老人の社会的役割を発揮させ，引き続き彼らを社会的活動の内に留めて置くかという事である。家庭生活における老人の地位・関係と役割，老人の思考と心理的変化の傾向，老人の物質的・精神的欲求原理など，これらは主として社会科学，とくに社会学が研究し解決すべき問題である。我々は老年学を，生理システムの老化を研究するのみの学問として把えてはならない。当然ながら前述の二方面は相互に独立しているが，それらは相互に連携を保ち，相互に滲透し合うべきである。健康と長寿に関する限り，そこには保健・医療の問題もあるが，また心理的要因や環境による影響などの社会的問題も介在し，それらは総合的に研究されて行かなければならない。

昨今は世界の多くの国々で，これらの問題に対する研究が重視されている。米国においては1974年に老年学研究所が開設され，現在では国内29ヵ所の高等教育機関に老年学課程が置かれている。英国においても老人研究会，全国老人愛護会が組織されている。日本には老年社会科学会があり，1964年には東京に老人総合研究所も設置されている。わが国においては1964年に初回の老年学・老人医学学術会議が開催された。最近では「老齢問題世界大会中国委員会」が正式に発足し，老人医学，老人心理学，老人社会学の研究活動を展開しており，如何にして老人の役割を継続的に発揮させるかが検討され，また大衆的な敬老活動も繰り広げられている。現在この分野の問題を研究する人員は増加しつつあり，近い将来には優れた研究成果が産み出されるに違いない。

老人の役割と長所

老人問題の研究を重視するのは，老人の比率が大幅に増加したからばかりではない。老人は各々に多くの長所を持ち，それは我々の社会に対して無視し得ない役割を有している。老人の実際的情況とその長所にもとづい

て，彼らの役割を充分に発揮させるには，彼らを研究し，彼らを理解する必要がある。

わが国の老人は，これまで智力と体力によって国家や社会に貢献して来た人々である。彼らが永年の社会的実践によって積み重ねた知識と経験は貴重な財産であり，四つの現代化達成の為に引き続き生かされよう。老人は智力が劣り，体力も衰弱していて役に立たないと主張する人もいるが，そのような考え方は当を得ていない。一般的に老年期を迎えれば智力，体力，記憶力などが次第に衰退して行く。これは正常な自然現象である。しかし心理学者が多くの実験によって認めたところでは，70歳以下の老人の場合，知能のピーク時期に対して87%にも相当する思考力と判断力を保持しているという。加えて老人は比較的豊富な実践的経験を備えており，一部の人は創造力さえも有している。上海の例を挙げるならば，近頃では従業員が退役後に再雇用され，彼らの豊富な知識，技能，経験が社会主義建設の為に引き続き活用されている。このような人々は退職者総数の約10%を占め，全部で10万人に達しており，その内7万人は市内に，3万人は市外に在住している。また北京の74歳になる一老人は，大学レベルの独学認定試験に参加し，合格証書と共に「勉学賞」を与えられた。わが国には「老馬は道を識る」という諺があるが，青年層に対する教育，養成，援助を通じて，老人持ち前の知識，技能，経験を，社会の物質的・知的生産の方面に引き続き利用する事，これも老人社会学研究の重要な目標の一つである。

わが国において老人は，家庭の円満に大切な役割を負っている。人間は集団の内に生活するが，その集団とは一定の社会的関係の下にある諸個人の集合体を指し，それには社会的団体や家族などの諸形態が包括されている。わが国では一般的に，老人は子や孫と同居しており，その為に家庭においては老人と家族との関係を適切に処理する事が，家庭の調和，幸福，円満を保証する重要な条件となる。

老人と家族との関係を適切に処理する為には，まず家庭における老人の地位と役割を充分に認識しなければならない。児童の教育，家事一般，家庭問題の解決などを始め，果ては若者への経済的な援助に到るまで，老人は家庭において大きな役割を負っている。「亀の甲より年の功」という諺は道理にかなっている。しかし家族構成に関する限り，老人とは別居するような傾向も現われ始めている。北京市の15歳から25歳までの青少年1071名を対象とした関係機関の調査によれば，その内の89.32%にのぼる者が老人と別居した家庭を作りたいと希望しているという。このような現象を生起させた背後には複雑な諸要因が存在する。しかし，家庭における老人の地位と役割が明確に認識されていないような事では，老人の機能を発揮させられず（逆機能を生じる場合すらある）そのような事も重要な要因の一つとなっていよう。

家庭において老人と家族との関係を適切に処理する為には，また老人の生理的・心理的傾向をわきまえなければならない。人間は65歳を過ぎると，およそ70%以上の者に，程度の差こそあれ人格上の変化が起こり始める。人によっては、分別のつかない子供のようになるとか，会話が幼稚になる，軽卒になる，

食物に齧りつくようになる，などが起こる。またある場合には，物事に対する反応が鈍化する，質問をしつこく繰り返す，独り言を発する，わが儘になる，気が短かくなる，なども起こる。このような「幼児回帰現象」が，まさに日頃呼ぶところの「赤子のような年寄り」である。老人にこのような症状が発生するのは，主として大脳の構造的変化と頭脳活動の衰退の結果であるとされている。この症状は男性よりも女性に多く，さらに文化的教養が高く，人格が堅固で，好学心のある人物には少ない。このような生理的傾向のほか，老人は往々にして周囲から隔絶されたかのような孤独感に落ち入る事もある。従って老人には物理的な生活の世話ばかりではなく，精神的な慰めも必要となる。老人を扶養するという事を単に「食事を与える事」と解釈してはならない。老人のこのような傾向をわきまえない若者達は老人を疎じたり，嫌悪感を抱いたりするが，これらは誤りである。

家庭において老人と家族との関係を適切に処理する為には，さらに社会の倫理道徳観を向上させねばならない。家族は社会の細胞であり，有史以来人類の最も基本的な生活単位とされている。代々の支配階級は，社会の下部構造の上に，家庭内の秩序を維持する際の倫理道徳観を重ね合せて，彼らの支配を堅固にしようと計った。半封建的・半植民地的な旧中国から移行した我々の社会主義社会には，新たな事象の萌芽もあったが，一方には旧社会の遺物も存在している。老人問題に対しても三種の異った倫理道徳観が存在し，それらは相互に争いながら，それぞれに消長を繰り返している。三種の倫理道徳観の内，一つは「孝」の一字に集約される封建主義的な倫理道徳である。「孝」とは何か。かつて孟懿子は孔子にこれを問うた。孔子曰く「孝とは背かざる事」。すなわち父母の言いつけには必ず従うという事である。いうならば「親は至高の存在」であって，一たび人の親となったならば，それは常に正しく，まさに親権は犯すべからず，なのである。子が親の誤りにかかわらず，それに盲従するという事，当然それは正しくない。二つ目は資本主義的な倫理で，これは「自己中心的」であり，そして「個人の利益」のみを追求しようとするものである。バルザックの小説『ゴルド』に描かれているように，家族関係をあからさまな金銭関係にすり換えるような事には，断固として反対しなければならない。三つ目は社会主義的な倫理道徳である。これは集団主義を中心としており，また家族の関係を民主的，友愛的，相互扶助的にするものである。さらにこれは老人を敬う事，親の面倒をみる事，そして老人を養う事が子孫の責任と義務であるとする。この倫理道徳は，封建主義的「孝」を否定し，また資本主義的「金銭関係」をも否定する。しかし社会主義的倫理道徳が存在しても，わが国古来の伝統的美徳を直ちに捨て去る事はできないのであって，如何にしてその内の有益な要素を批判的に摂取するかに関して，今後一層の討論と研究がなされるべきであろう。

研究されるべき若干の問題について

1　老人扶養の問題について

現在わが国の老人は，その多くが円満な家

庭生活を営んでいるが，時には老人が虐待されるという事件も発生し，また老人を軽んずるばかりに，その面倒を見ないという事例もままある。上海のある地区を調査したところ，子や孫と老人が同居している家庭では，老人による収入の有無すなわち老人の懐具合の差が，家族の態度にも現われている。これは親族による老後の保障，いうならば「親族保険」が充分に機能していない事の証明である。わが国の憲法に定められた「子女は両親を扶養する義務を有する」「老人の虐待を禁止する」などの条文が完全には生かされていない。この問題については，さらに調査・研究を展開する必要があり，また社会主義的倫理道徳観の宣伝と教育を強化し，老人保護法を研究，制定し，法的な保障と社会的世論の支持が得られるようにすべきである。

2　独居老人の問題について

独居老人とは，配偶者を失い，世話をしてくれる家族を持たない老人である。中国共産党と国家は独居老人に関心をはらい，彼らの面倒をみている。都市には全て敬老院や福利院があり，それらは一部の農村にも設置され始めている。またある農村では養老金制度も発足しており，それらは社会主義体制の優越性を具体化している。当面の問題は，伝統的観念に支配された一部の独居老人が敬老院への収容を望まない事，収入の比較的多い退職独居老人が高級な福利院を希望しても必ずしもそれが適(かな)えられない事などである。また農村では生産責任制が実施されて以降は，敬老院の運営に関して切迫した問題が山積している。さらには，敬老院に収容されていない独居老人の世話を如何にすべきかの問題がある。なお上海の各地区には独居老人の世話をする「責任養護組織」が設けられている。それらの問題についても研究を加える必要があろう。

3　退職者の問題について

解放から30数年間，わが国の退役従業員数は増加し続けて来た。統計によれば，上海の企業や事業所の多くでは，現役従業員と退役従業員の比率が前者の2に対して後者1に達しており，（紡績工場のような）一部の工場では既にそれが1対1に達している。企業の退役従業員への退休金を始め，医療費そのほか生活一般の世話は，全て企業が手配することになっている。その事が企業の経営管理や財務会計に少なからぬ問題をもたらしている。労働組合の話によれば，退役従業員は組合の行動に参加せず，組合員の資格を留保しているのみであるから，組合としては彼らにまで手が回らないという。また退役従業員は生活費その他の面で企業の管理化に置かれている為に，所轄の住民委員会も口を出しにくいという。このように退役従業員の多くは帰属する場を持たない状態で，それが彼らに生活上の不便と思想上の苦悩を招いている。以上のような実情から，退役従業員を集中的に指導・管理する専門機関を設置すべきかどうか，これも研究に値する問題となる。退役従業員に対しては，その生活上の面倒をよくみるばかりでなく，彼らの社会における役割と家庭における役割を発揮させなければならない。社会的役割としては，技能に優れ体調も良好な退役従業員を関係企業に派遣し，技術指導

に当てる事もできよう。そのほかにも防犯活動，住民紛争の仲裁，交通秩序の維持，隣組活動の仕事もある。また老人は家庭教育や家事一般についても大きな役割を発揮できよう。老人を統率してこれを組織し，そのような仕事を任せたならば，社会と家庭に貢献させるばかりか，それは老人の生活を豊かにし，老人の精神衛生にも好ましいものとなろう。

4　社会的サービスの問題について

敬老院や福利院に収容し得る人数には限りがある為，大多数の老人は社会の到る処に分散しているが，現状では彼らの日常生活に対するサービスは不充分である。——商店では流行の服装は多量に販売されているものの，老人にふさわしい衣服・靴・帽子を探す事は難しい。また老人が外出する際の交通機関，これが難問である。乗合バスは混んでおり，往々にして乗車できないこともある。何とか乗る事はできても座席は埋っている。さらに病院では老人の外来患者も青年・中年と同様に長蛇の列に加わらざるを得ない。そして文化活動・体育活動すらも楽しいものではない。——という事柄が挙げられる。その他に老人教室の開設，老人向けの読み物の出版など，それらの課題についても専門的な研究が行なわれ，各部門の密切な連携によって逐次解決されていくべきであろう。

5　社会的風潮の問題について

社会主義社会において，我々は老人の物質的生活を保障するのみならず，老人の精神的生活も豊かにし，その社会的地位を向上させねばならない。社会に広く敬老の新たな風潮を造り出す為には，普段から絶えず宣伝と教育を行なうほかに，「老人の日」の制定や「老人月間」の展開などの活動を行なって，集中的に敬老の宣伝と教育を繰り広げる必要があろう。発達した資本主義諸国にあっては，一部の老人の物質的生活は恵まれているものの，精神的生活には苦痛が伴い，人々は甚だ孤独である。子が成人した後は老人との同居を望まず，両親を顧みる者は稀である。とくに貧困な両親は子に嫌われ，老人は孤独で苦しい悲惨な生活を送らざるを得ず，彼らは1匹の犬あるいは1匹の猫を友とするのみである。多くの老人が「息子や娘を育てるより，犬猫を飼うほうがましだ。」と嘆いているのも頷ける。

わが国には古来より，老人を扶養し，老人を尊敬し，老人を愛護するという伝統的美徳が存在したが，新中国の建国後は，それを家庭が主体となって集団や国家と共に老人の世話をするという制度と社会道徳的気風に発展させた。今のところわが国人民の生活水準は高くないものの，老人は食に窮せず，生活は安定し，子や孫と一緒に家族団欒を楽しんでいる。多くの退役幹部は誠意をもって青年・中年の幹部を支援し，よき助言者として国家と社会への貢献を続けている。それらは老人問題解決の「中国的方向」として世界の人々に称えられており，「中国に代表されるアジアの方式は，全世界の老人問題解決の正確な路線である。」とされている。

老齢問題世界大会事務総長ケリガンは「現代化国家を建設すると同時に，中国が良好な家族関係と老人の適切な処遇の模範例を示す事を望んでいる。それは人類への一大貢献と

なろう。」と述べた。

社会全体からいえば若者は老人を尊敬すべきであるが，一方老人自身については，自己に厳しく，威厳を保ち，若者にとって真に人生の先輩たらんとする必要がある。わが国の著名な社会学者費孝通は，老人の為に六カ条からなる心得を提示し，老人が学習を継続して自己の精神を不断に再生する事を願った。

社会の進歩を阻害しない。

一生かかって得た知識は可能な限り次代に引き継ぐ。

威厳を保ち，やましい行ないは謹しむ。

日々の鍛練を欠さず，健康を保つ。

家族の浪費を心配せず，自分がその手本を示す。

自分の事業に良き後継者を養成する。

この「老人心得」には多くの老人から賛意と共に，身をもって励行しているとの便りも寄せられた。社会の物質的生活の向上と精神的文化の発展に伴って，老人はますます幸福な晩年の生活を送るようになり，国家に対して，社会に対して，さらに貢献してくれるであろう事を，我々は確信しているのである。

〖訳者解説〗

○この論文の著者である袁緝輝氏は現在上海大学文学院（元の復旦大学分校）社会学系主任・副教授の職にあり，中国社会学会理事，上海市社会学学会副秘書長，上海市老人問題研究会副会長などを兼ねる。また中国で唯一の社会学専門誌『社会』（隔月刊）の主筆を勤めるなど，同国の社会学界をリードする存在といえる。1932 年生まれ，満 52 歳。1953 年復旦大学経済学系を卒業。その後 1956 年中国人民大学マルクス・レーニン主義研究科を修了。

○この論文の原題は「開展老年社会学的研究是一件大事（老人社会学研究の展開は重要な事柄である）」。『社会』1982 年第 3 期（総第 4 期）に発表，その後『新華文摘』『人民大学復印報刊資料』などに転載された。

○訳出するにあたっては，趙治明氏（1983 年広州外語学院を卒業との事）の日本語訳を参照させて頂いた。趙氏には謝意を表したい。